

保育者養成におけるきょうだい児支援を学ぶ 意義と役割について

—— 特別なニーズをもつ子どもの視点から ——

吉野 真弓¹⁾

The Meaning and the Role of Learning Support for Siblings in Early Childhood Educator Training:

from the Prospect of Child with Special Needs

Mayumi Yoshino

Abstract

The purpose of this study is to clarify the meaning and the role of learning support for siblings in early childhood educator training.

This survey was conducted using a questionnaire. From the results of the survey, the students didn't know the siblings' problems. The students thought of very necessary for learning support for siblings. The learning about siblings' support through group work was share each other's thoughts and get new insights.

It became clear of the meaning and the role of learning support for siblings in early childhood educator training. It was important of the learning about siblings' support for siblings in early childhood educator training.

Key words: early childhood educator training, siblings,

the education of children with poor health, family support, child rearing support

キーワード: 保育者養成, きょうだい児, 病弱教育, 家族支援, 子育て支援

1. はじめに

家族にとって子どもが重篤な病気や障害をもつことは、家族の危機に陥りやすいといわれている。また病気や障害のある子どもにきょうだいがいる際は家族にとってさらにシビアな状況におかれることになることが明らかとなっている¹⁾。親にとって、子どもの病気や障害が明らかになることは、大きな心理的なショックをもたらす出来事であり、身体的負担、精神的負担、経済的負担が高いことも知られている²⁾。

このようなケースの場合、家族の支援では、病気や障害をもつ子どものきょうだいへの支援が必要となってくる。以下このきょうだいのことを「きょうだい児」とする。家族に病気や障害のある子どもがいる場合、病気や障害のないきょうだいはいろいろな場面で同年齢の子どもとは異なる経験を余儀なくされることがある。親はきょうだいのことが気になっても、十分に手をかけることが難しくなってしまうことも少なくない。きょうだいは親にかまってほしいという気持ちやさみしいといった気持ちが出せないことが多く、特に

1) 育英短期大学保育学科

きょうだいはまだ小さな子どもの場合、親が自分に目を向ける余裕がない状況が続くことは望ましい生育環境とはいえない。「きょうだい児」にとっても、他のきょうだいが病気や障害をもっているということは大きな心理的問題をかかえることがある。立山（2003）は障害児の母親と障害児のきょうだいへの面接を行い、発達過程におけるきょうだいに見られた気がかりな兆候を明らかにしている。立山の研究からも先に述べたように「きょうだい児」は、親が障害をもった子どもで精神的にも肉体的にも手がいっぱいになることによって、「きょうだい児」が円形脱毛や夜尿などを引き起こしていることを指摘している。またきょうだい児が障害児を援助する役割を担う傾向があり、自分を出しにくいことを明らかにしている³⁾。これまで病気や障害をもつきょうだいの研究は、「きょうだい児」に注目した研究やそのサポートをどのようなものにしたらいかに焦点がおかれたものが多くをしめてきた⁴⁾⁵⁾⁶⁾。また「きょうだい児」が障害のあるきょうだいの将来に対する思いや不安、葛藤などを明らかにしたものが⁷⁾。また障害のある子どものきょうだいに対する母親の思いを分析した調査からは、「きょうだい児」が成長していくなかでの負担を懸念しつつ、母親にとっては「きょうだい児」は、母親を助けてくれる大きな存在となっていることを明らかにしている⁸⁾。

一方で、柳澤（2007）は「きょうだい児」が直面する諸問題とそれに対する支援の動向をとらえ、今後きょうだい児に対する支援について、発達段階のどの時期にどのような情報を提示し、教育的支援の内容を体系的に構築していく必要性を述べている⁹⁾。また「きょうだい児」に対する教育的支援プログラムの開発と効果の検討がなされているものもあり、その中での病気や障害を持った子どもの気持ちを理解するためクイズやディスカッションを通しての活動は、ストレスが高かった「きょうだい児」のストレスを軽減させたことを

明らかにした¹⁰⁾。また家族に対しての支援プログラムを行うことによって、きょうだいへのかかわりが変化した面や親子のかかわりが促進される効果があったと述べている¹¹⁾。

これらの先行研究により、病気や障害のある子どもだけでなくその「きょうだい児」も含めた家族全体を支援するという視点、「きょうだい児」をサポートする専門家としての役割が求められているといえよう。今日、保育の現場には病気や障害をもった子どもたちへの支援だけでなく、家族支援の役割が求められている。また近年保育者の役割として子育て支援の重要性が求められている。しかしながら保育者が「きょうだい児」について学ぶ方法や意義を示したものはほとんど見られない。

そこで本研究では、将来保育者になっていく学生にとって障害をもつ子どもの「きょうだい児」について学ぶことは保育者になる学生に意義があることなのかを探るとともに、効果的に学ぶ方法や保育者をめざす学生への「きょうだい児」への意識について明らかにすることを目的とする。

2. 方 法

調査対象者：調査時期は2016年4月～2016年7月である。「きょうだい児」の理解を深めるための授業を4～5名をひとつのグループとし、グループワークを実践した。対象者は、A短期大学2年生210名である。活動内容は次のとおりである。授業者が授業のはじめにきょうだい児が置かれた現状を話した後に、グループ活動として、①「きょうだい児」の気持ちについて考える。②現在自分ができるボランティアについて考える。③将来保育者になって必要な支援について考える。この3つについてグループワークを行った。調査方法はグループワークを行った後、アンケート調査を実施した。

3. 結 果

アンケート配布数は210通とし、回収数は207通であった。回収率は98.6%であった。アンケートは無記名とし、調査の同意があったもののみを分析・考察を行った。

サンプルの属性について性別は女性が100%、平均年齢は19.3歳であった。

図1より、「きょうだい児について知っていたか」とたずねたところ、92.0%が「知らなかった」と回答しており、8.0%が「知っていた」と回答

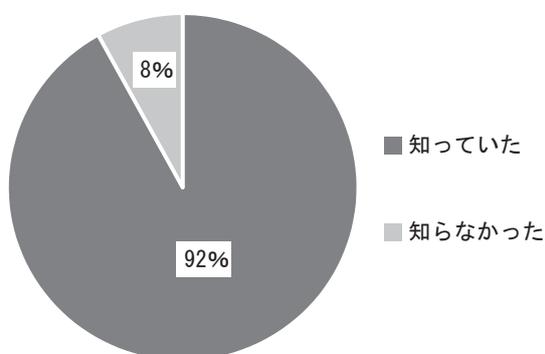


図1 「きょうだい児」のことを知っていたか

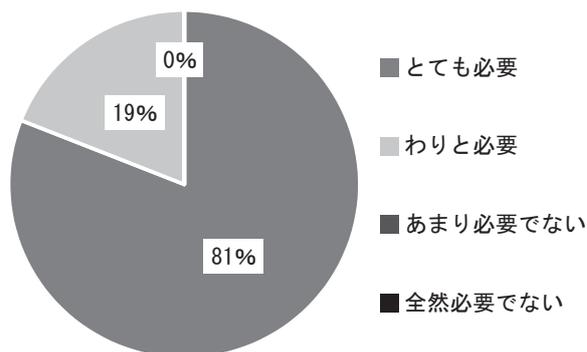


図2 「きょうだい児」について学ぶことは保育者になるために必要か

していた。「きょうだい児」について知っているものはほとんどいなかった。

図2より、「保育者養成機関において「きょうだい児」について学ぶことは保育者になるために必要か」についてたずねた。保育者が「きょうだい児」を学ぶことについて、「とても必要」、「わりと必要」、「あまり必要でない」、「全然必要でない」の4段階でたずねたところ、「とても必要」と回答したものは81.0%で、「わりと必要」と回答したものは、19.0%であった。「とても必要」と回答しているものが高かった。

図3はグループワークの学生の様子である。4～5人のグループで活動を行った様子が示されている。模造紙を使いグループで課題にのぞんだ後、それぞれのグループが全体の前で発表を行った。その様子が示されている。それぞれのグループで

図3 グループワークの様子および全体での発表の様子



工夫が見られまたメンバー同士の活発な意見交換がなされていた。全員の前で発表することで情報の共有化を図った。

次に自由記述について分析を行う。自由記述はこの「きょうだい児」支援についての学びを通しての感想について分析を行った。アンケートの中

の記述は大きく3つの項目に分けられた。表1は、カテゴリーに合うものの中で主なものを抽出したものである。1つ目は、「きょうだい児」の知識について、2つ目は他者との情報共有、3つ目は将来の保育者としての意識である。

表1の自由記述から3つのカテゴリーが抽出さ

表1 きょうだい児について学んだ結果（自由記述の分析より）

1. きょうだい児についての知識	
	<ul style="list-style-type: none"> ・今日初めて、きょうだい児のことを知りました。きょうだい児について知ってからそのことを考えることは保育者になるにあたって大事だと思いました。とても良い勉強になりました。色々な意見が出てきて参考になりました。きょうだい児と保育する場面があったときには、その子に寄り添って関わってあげたいと思いました。 ・きょうだい児を知らなかったので知れてよかったです。もっとみんなにも知ってほしいと思いました。子どもの気持ちやしたいことがわかり、援助の仕方がより明確になってよかったですと思います。 ・きょうだい児について普段は考えたことがなかったので、今日の授業を受けてこれから考えていこうと思いました。きょうだい児支援は保育者にとってとても大切だと思いました。 ・この授業を受けて初めてきょうだい児という言葉を知りました。こういう問題に立ちあつたら保育者として支援していきたいと思いました。 ・今まで病気の子どもや障害を持った子どもの支援ばかりを学んできたので、そのきょうだいに対する支援があることを初めて知り、驚きました。よく考えてみると、きょうだい児の支援も大事だと思いました。我慢していたり、寂しい思いをしている子を助けたいと思いました。 ・今まできょうだい児という存在を考えずに実習に行っていたので、もし実習先にきょうだい児がいたら、先生方がどのように支援しているのか見ようと思います。各班、ボランティアや援助の仕方がさまざま聞いていてこのような意見があるのかと勉強になりました。
2. 他者との情報の共有	
	<ul style="list-style-type: none"> ・きょうだい児支援のボランティア活動を出し合って、保育園や幼稚園での活動よりも自由で家族で遊び行くような活動（BBQとか）ができるのだなと思いました。そのような活動の方が幼児は自分の気持ちを表現できると思います。病児支援論の授業でも、病児の家族の支援について勉強することができましたが、他の人の意見を聞く機会はなかったので、とても勉強になりました。 ・友人と協力して深く考えてみるとその人の個性が出てきているようでした。保育に関する問題は沢山ありますが、他の人と考えを共有することはあまりないので良い経験になりました。 ・友達と意見を出し合って色々なとらえ方が知れてためになりました。先生がグループを回ってアドバイスしてくれたので進めやすかった、わかりやすかった。きょうだい児の支援も保育者には必要ということを知ることができた。

	<ul style="list-style-type: none"> ・今回の授業で初めて「きょうだい児」という言葉を知りました。私は「病児支援論」という講義を受けていて病気の子どもについては少し勉強して知っていました。しかし、今回のようにその病気の子どものきょうだいにまで考えたことはありませんでした。<u>自分たちで意見を出し合ったことで自分がどう考えているのかを知ることもできましたし、周りの友人のアイデアも知る事ができ、新しい発見が多かったです。</u> 初めてきょうだい児という言葉聞き、学ぶことができとても良い経験になったと思いました。きょうだい児の気持ちを考え、<u>グループで話すことで、自分では考えつかなかった思いを見ることができて良かったです。</u>きょうだい児の子ども達にも寄り添える保育者になりたいと思いました。
3. 将来の保育者としての意識	
	<ul style="list-style-type: none"> ・保育の現場でも、きょうだい児はいます。保育者は様々なことを抱えた子どもと関わらなければなりません。そのため、きょうだい児にも、言葉がけの配慮をする必要があると思います。<u>今回の学習を踏まえた関わりができるよう、きょうだい児についての知識を深めたいと思います。</u> ・今まできょうだい児の支援なんて考えたこともありませんでした。しかし、今回学んでみてきょうだい児支援の重要性と必要性を感じました。私が<u>保育者になった時にはこのようなきょうだい児支援に積極的に取り組みたい</u>と思います。 ・きょうだい児という言葉今日の授業をするまで知りませんでした。<u>保育者になる上ではきょうだい児について理解しておくべきだ</u>と思います。特別扱いはしないが、常に見守り時には寄り添うことがとても大切だと思います。これからも、きょうだい児という言葉忘れずに考えていきたいです。 ・きょうだい児の気持ちを考えてみて「<u>もし就職したときにそのような子がいたら、より深い支援ができる</u>」と思った。 ・障害児についての学習はしてきて、注意すべきことや保護者のケアなどは考えたことがあったが、その他にもきょうだい児がいるということ初めて知りました。言われてみれば、きょうだい児には両親の目が行きにくく本当は配慮が必要なのにおろそかになっている面があると思いました。今日の内容を活かせたらと思います。 ・きょうだい児の気持ちになり、みんなで協力しながら多くの付箋を貼ることができた。今日行った活動のような子が本当にいたらとても寂しいだろうと思う。もし将来現場で働いているときにそのような孤独で寂しい気持ちになっている子がいたらその子の気持ちをしっかりと理解して関わっていきたくと思った。「<u>保育者としてどのような支援を行っていききたいか</u>」で出た答え、聞いた答えを実践してみようと思った。 ・今まで言葉も知らず、考えたこともありませんでした。<u>自分には関係のないことだ</u>と思っていたけど、今日勉強して、<u>将来働くうえで理解しなければいけないことだ</u>と思いました。良い勉強になりました。 ・今までは病気を持っている子に目を向けていたので、視野を広げることができた。きょうだい児も親からあまり目を向けられていなくて辛い思いをしていたとわかった。そんな<u>気持ちに寄り添えるような保育者になりたい</u>と思った。 ・今まできょうだい児のことについて考えることはありませんでした。しかし、実際にそのような子どもがいることが分かったり、<u>保育者としてその子どもを支えることができることも分かったり</u>しました。きょうだい児がどのようなことを求めているのか、どのようなことをしたいのかを読み取り、支えていくことが大切だと思いました。

れた。1つ目のカテゴリーとして、「きょうだい児」の知識についてである。表1より、「初めて、きょうだい児のことを知りました」、「きょうだい児について普段は考えたことがなかった」と「きょうだい児」の知識がなかったことを示している。そのうえで「きょうだい児」の気持ちを考えることができたとしている。2つ目のカテゴリーとして他者との情報の共有があげられた。表1より、「他の人の意見を聞く機会があまりないのでいい経験になった」、「友達と意見を出し合い、いろいろなとらえかたができた」、「自分では気付かなかったことに気づけた」といった意見が出た。周りの人のアイデアを知ることができたと述べている。3つ目のカテゴリーとして将来の保育者としての意識があげられた。例えば「私が保育者になった時にはこのような「きょうだい児」の支援に積極的に取り組みたい」「もし就職したときにそのような子がいたら、より深い支援ができる」「保育者としてどのような支援を行っていきたいか」で出た答え、聞いた答えを実践してみようと思った」といった意見が出た。これらから「きょうだい児」についての知識はほとんどなかったものの、「きょうだい児」の気持ちについて考えることができた。またグループ活動を通して、「他の人と意見を共有することで勉強になった」、「保育者として支援をすることを考えるきっかけになった」というように他者との情報の共有化がなされていた。さらに将来保育者になったときに「きょうだい児」や家族まで含めた家族支援の必要性について言及しているものがあった。

本授業を実施することで、「きょうだい児」の存在を知らなかったものも「きょうだい児」とその家族について学ぶことにより、将来保育者になった際、どのように支援していったらいいのか考えるきっかけにつながったといえる。また「きょうだい児」について保育者養成で学ぶことの意義が見出された。

4. 考 察

「きょうだい児」について知っているものはほとんどいない実状がアンケート結果から明らかとなった。「きょうだい児」という存在自体がいることに気づいていなかったと自由記述の中で回答していることも踏まえるときょうだいへの支援にまで考えが行き着いていないのが現状である。

また「きょうだい児」という言葉自体も知らなかったと答えたものが自由記述で多かったため、言葉とともに「きょうだい児」の支援の現状もあまり知られていないことが明らかとなった。最近保育現場では、特別な支援が必要な子どもへの対応や家族支援が求められている。その家族支援をする際には家族全体を支援する必要がある。その中で「きょうだい児」といったことにも目を向けていく必要があるだろう。またこのようなグループ活動を通して「きょうだい児」を学ぶことについて学生は自分たちの問題としてとらえることができた。グループワークでの活動は他者との考えを共有でき、相互に学生は新しい知見をえることができ、効果的であるといえる。

本活動を実施することで、将来保育者になった際、「きょうだい児」やその家族をどのように支援していったらいいのかを考えるきっかけにつながったといえる。また「きょうだい児」について保育者養成で学ぶことの意義が見出された。今日保育者は様々な役割が求められている。新しい保育指針にも保育者はより、子育て支援・家族支援の重要性が求められている。家族支援の視点の中に「きょうだい児」支援の視点を取り入れていくことが非常に大切であろう。

5. ま と め

本研究では、将来保育者になっていく学生にとって障害をもつ子どもの「きょうだい児」について学ぶことは保育者になる学生に意義があるこ

となのかを探るとともに、効果的に学ぶ方法や保育者をめざす学生への「きょうだい児」への意識について明らかにすることを目的とした。1. 「きょうだい児」について知っている者は、ほとんどいなかった。2. グループワークを通して、「きょうだい児」支援について学ぶことは、お互いの考えを共有しあい、新しい知見が得られると考えられる。3. 将来、保育者となるためには「きょうだい児」支援について学ぶ意義と役割が見いだされた。今後の課題としてあげられることは次の通りである。

これまで保育者養成における「きょうだい児」支援の知識の現状及び学ぶ意義と役割について述べてきた。今後さらに保育者養成課程でどのようなカリキュラムの中で学んでいくか。今回は自分たちができることからグループ活動を通して、自分たちができることから「きょうだい児」支援ができる考えを抽出していったが、実践ではどのようにいかし、実際にはどのような効果が得られたか実証する必要があると考える。また現場の保育者にも「きょうだい児」支援をひろめていく必要があると考える。今回得られた知見から、保育者養成の家族支援のカリキュラムの中に「きょうだい児」支援をさらに深めていく機会を増やしていくことが課題であろう。

引用文献・参考文献

- 1) 高瀬夏代・井上雅彦 (2007) 障害児・者のきょうだい研究の動向と今後の研究の方向性. 発達心理臨床研究. 第13巻. 65-78
- 2) 吉野真弓・草野篤子・吉野浩之 (他) (2002) 難病の子どもを抱えた家族—生体肝移植経験家族の場

合一. 日本家政学会誌. 53巻. 6号. 529-538

- 3) 立山清美・立山順一・宮前珠子 (2003) 障害児の「きょうだい」の成長過程に見られる気になる兆候—その原因と母親の「きょうだい」への配慮—. 広大保健学ジャーナル. 3巻. 37-44
- 4) 尾形明子・瀬戸上美咲・近藤綾 (2011) きょうだい児におけるストレス反応とソーシャルサポートおよびセルフフェスティームの関連. 広島大学心理学研究. 第11号. 201-213
- 5) 三宅理子 (2011) 障害児難病児のきょうだいの会「スプーンの会」の活動の意義と課題. 教育臨床総合研究10 2011研究. 67-79
- 6) 笹尾由佳理・佐藤朝美・廣瀬幸美 (2017) 母子分離を体験しているNICU入院児の乳幼児期のきょうだい児への看護支援. 日本小児看護学会誌. 第26巻. 97-103
- 7) 春野聡子・石山貴章 (2011) 障害者のきょうだいの思いの変容と将来に対する考え方. 応用障害心理学研究. 第10号. 39-47
- 8) 川上あずさ・牛尾禮子 (2012) 自閉症障害のある子どものきょうだいに対する母親の思い. 家族看護学研究. 第17巻. 第3号. 126-134
- 9) 柳澤亜希子 (2007) 障害児・者のきょうだいが抱える諸問題と支援のありかた. 特殊教育学研究. 45(1). 13-23
- 10) 阿部美穂子・水野奈央 (2012) 発達障害のある子どものきょうだい児に対する教育的支援プログラムの開発と効果の検討—小グループによる実践から—. とやま発達福祉学年報. 3. 3-20
- 11) 水野奈央・阿部美穂子 (2012) 発達障害のある子どものきょうだい児に対する教育的支援プログラムの開発と効果の検討 (2)—実践に対する保護者評価から—. とやま発達福祉学年報. 3. 43-54

(2018年2月1日受理)